様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２８００２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２４１２

研究課題名（和文）地域の生活文化を基盤にした高齢者ケアの創出のプロセス評価

研究課題名（英文）Evaluation of the process of developing care for older people based on the local lifestyle and culture

研究代表者
大湾　明美（Ohwan, Akemi）

沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・名誉教授

研究者番号：８０１８５４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、地域の生活文化を基盤に高齢者ケアの創出を試み、そのプロセスから相互扶助体系（公助・互助・自助）による評価を行い、島嶼地域の実情に応じた地域包括ケアシステム構築のための知見を得ることであった。
H島における高齢者ケアの創出プロセスには、住民の主体性の発揮（自助）と相互扶助（互助）の活性化が見いだされた。その連携強化により、相互扶助体系は、同心円になり補い合い、重なり合い重層化していったと考えられた。そして、「みんなでみんなのものにする高齢者ケア」として、地域の生活文化への浸透が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、狭小性、隔絶性、孤立性の地域特性を持つ島嶼地域においては、住民の主体性の発揮（自助）と相互扶助（互助）の活性化によって、相互扶助体系が地域で連携ではなく、包括的になり重層化することを実践事例から明らかにしたことである。相互扶助体系は、高齢者ケアを地域で住民と協働で実践することで連携から包括へと進化する可能性を示唆したことである。
本研究の社会的意義は、生活文化が凝縮している島嶼地域における地域包括ケアシステムの構築には、相互扶助体系の自助と互助に働きかけることで、高齢者ケアの脆弱性の緩和に貢献できることである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop care for older people based on the local lifestyle and culture, to assess the development process from the perspective of the mutual support system (public assistance, mutual aid, and self-help), and to gain knowledge for the establishment of a comprehensive community care service system in accordance with the actual conditions of island communities. The activation of a residents' initiative (self-assistance) and mutual support (mutual aid) was observed in the 6 processes involved in creating care for older people on Island H. Through strengthened cooperation, the mutual support system formed concentric circles that complemented and overlapped with one another in a multilayered structure. It was suggested that this became ingrained in the local lifestyle and culture as the "care for older people that everyone participates in and takes ownership of."

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者ケア　生活文化　小離島　住民の主体性　相互扶助

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1）本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

超高齢社会にある我が国の高齢者ケアの方向性は、各市町村に地域の実情に応じた地域包括ケアシステムの構築を義務化している。都市地域においては医療と介護が効率的で効果的な提供システムに至っていないことが課題であり、その連携強化に向けて推進している。しかし、医療と介護の脆弱な地域においては、医療や介護の「公助」・「共助」の活性化は限定的である。都市地域とは異なる地域包括ケアシステムの構築の創出が必要であると考える。その戦略として、地域の生活文化を基盤に、住民の主体性（自助）の発揮と相互扶助（互助）の活性化が重要であると考える。

地域包括ケアに関する研究は、2025 年問題を抱え世界に類をみない超高齢社会にある我が国が先行し、保健医療分野より福祉分野でおこなわれている。しかし、地域福祉と地域包括ケア、病院機能分化と地域包括ケア、地域包括ケアにおける住民主体、市町村と地域包括ケアなどに関わるモデル事業を紹介し地域包括ケアの理念や特徴に関する研究であり緒についたばかりである。

太田（2011）は、そのような研究動向を整理し、地域包括ケアシステムには二面性があるとし、ケアの場を医療や施設ではなく地域へと転換する捉え方と、地域ケアによる地域づくりとしての捉え方があると述べている。研究者（2005）は、参加型アクションリサーチの手法で、島嶼地域において地域ケアの開発による地域包括ケアシステムの構築に関する研究の経験から、医療と介護の脆弱な地域においては、地域住民のつながりを資源とした「互助」の活性化による地域づくりの視点が重要であると述べてきた。そして、共同研究者の野口（2011）は、地域ケアは「地域でのケア」ではなく「地域によるケア」であるとし、地域で暮らす住民による住民のための活動であると述べている。さらに、M.Bayley(1973) は、地域ケアには発展レベルがあるとし、第 1 段階（Care Out of Community）、第 2 段階（Care in the Community）、第 3 段階（Care by the Community）に整理している。第 3 段階は、社会のサービスに加え、地域に暮らす住民による住民のための活動で支え合いが成熟した段階であり、地域包括ケアのめざす方向である。このように、地域包括ケアシステムの構築は、専門職と地域住民とが協働で創るケアをめざすことであると考える。

ところで、専門職と地域住民が協働で創るケアとはどのようなものであろうか？どのように創ればよいのだろうか？それは、地域住民に馴染むケアであり、地域の実情に応じるケアであり、住民が主体的に創るケアであると考える。そのような地域ケア（高齢者ケア）とは、地域の生活文化（日常の暮らしとそこにみられるその地域住民の行動や価値観、それを支える祭事・行事）に基づくものではなかろうか？その検証のためには、住民とともに暮らしと健康・介護の課題を共有し、その課題解決に向けて住民の主体性の発揮と相互扶助の活性化を手がかりに高齢者ケアの創出を試みその評価を行う必要がある。

2）これまでの研究成果と本研究の着想

研究者は、専門職と地域住民及び行政との協働による参加型アクションリサーチを展開し「沖縄県の一離島における高齢者の地域ケアシステム構築に関する研究」で、関係者間の助け合いである「互助」の活性化により地域ケアを創出し、地域ケアシステム構築の可能性につながったことから、「公助」・「共助」依存性の強い地域ケアシステムの限界と問題点に示唆を与えた（大湾明美　学位論文　2005 年）。また、共同研究者の野口が研究指導した論文では、伝統行事に参加する、友人と方言で話すなどの地域文化行動は、交流をとおして思いを共有し、心を落ち着かせ安心することにより幸福感に影響するという知見を得、看護教育に活かしていくことを提案した（下地敏洋　学位論文　2007 年）。さらに、「島しょ・へき地の地域包括ケアシステム構築支援事業」で 2 つのモデル島を設定し、住民と行政と専門職による住民会議を定期開催し、住民の主体性発揮と相互扶助の活性化による地域包括ケアシステムが構築できるよう地域貢献を行った（事業代表　大湾明美　2015 年）。2 つの島での高齢者ケアの創出には、同じ島しょ地域であっても、それぞれ地域で異なる生活文化に強く影響されていることが明らかになった。

地域の生活文化のスペシャリストは住民であり、その生活文化に寄り添いながら高齢者ケアを創出するために、その支援のあり方を明らかにし、地域包括ケアシステムの構築につなげるプロセス評価を行う必要がある。これは、研究者が 2000 年から継続して実施してきた研究成果を元に、「地域の生活文化」という新たな視点で、高齢者ケアの創出の方法を提案するものである。

２．研究の目的

地域の生活文化を基盤に住民の主体性（自助）の発揮と相互扶助（互助）の活性化を手がかりとして高齢者ケアの創出を試み、そのプロセス評価を行うことにより、医療と介護の脆弱な地域でその地域の実情に応じた地域包括ケアシステム構築のための知見を得ることである。地域の生活文化とは、島嶼の持つ狭小性、隔絶性、孤立性から、自分たちのことは自分たちで工夫する「自助努力」、お互いに助け合って生きる「互助づくり」、また、青年会や婦人会、老人会、公民館活動など地区組織活動をしながら、伝統行事や地域行事で「共に楽しむ」とした。それは、高齢者ケアを「みんなでみんなのものにする活動」とした。

３．研究の方法

研究デザインは、参加型アクションリサーチである。

1）研究フィールド

研究フィールドは、研究者が2000年から介入しているH島とした。H島は人口 500 人余、主産業は農業（サトウキビ）と観光業である。サトウキビの収穫は、隣人などが助け合う協働農作業「ゆい」が残っていた。また、日常の買い物をする売店は、集落で世帯ごとに出資して運営し、その収益は再配分されていた。伝統行事は毎年、島をあげて盛大に行われ豊年祈願と祖霊への供養、島民の慰安と娯楽、連帯と団結が図られていた。

島には診療所があり医師１名、看護師１名が常駐している。役場は島外で、役場出張所がある。介護保険制度前は、介護サービスは訪問介護のみであった。2000 年には「沖縄県離島・過疎地域支援事業」のモデル地区となり、行政、大学の支援により、全数調査で明らかにされた高齢者のニーズに基づき「要介護状態になっても島に住み続け、住み遂げることを支援する」を理念として住民主体の NPO 法人が誕生した。2023 年現在、島唯一の診療所の医師、看護師との協働でNPO 法人運営の小規模多機能居宅介護事業所が中心となり、高齢者の多様なニーズに対応している。

2）データ収集・分析の方法

2005 年（研究者が介入を終えた後）から 2023 年（現在）までに新たに創出された高齢者ケアについて、共同研究で取り組んだ学会発表と論文から、診療所看護師と居宅介護支援事業所の管理者（介護職）、及び介護支援専門員（介護職）を研究参加者とし、その内容を読み込み、不明な点は追記した。分析の視点は、地域ケアの創出に住民の主体性（自助）の発揮はどのようなものか、相互扶助（互助）の活性化は図られているかとの問いをかけ、地域文化は高齢者ケアの創出にどのように生かされているのかについて質的帰納的に分析した。【　】はカテゴリーである。

3）倫理的配慮

研究参加者に対し、研究計画書を提示し研究の趣旨を伝え、参加は自由意思に基づくこと、個人情報は守られることなどを文書と口頭で説明し、同意を得た。本研究は、研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会に置いて承認を得て実施した（承認番号 19009）。

４．研究成果

1）高齢者ケアの創出のプロセス

2005 年までの高齢者ケアの創出プロセスの研究者の先行研究では、「互助」のエンパワメントにより「公助」と「自助」が影響し、それぞれが地域で連携し強化されていた。つまり、H 島の「自助」と「互助」は高齢者ケアの創出でエンパワーされ、高齢者ケアは新たな「生活文化」となる可能性が示された。

2005 年以降に、誕生した高齢者の地域ケアは 6 つあった。NPO 法人を中心に制度で定められ予算確保が可能な法定給付サービスである小規模居宅介護事業所に加え、地域特性により、住民の必要性から、①逆ふるさと訪問、②島丸ごと認知症サポーター養成講座、③介護技術力アップ講座、④花壇づくりで高齢者見守り活動、⑤要介護高齢者の就労支援活動、⑥すむづれ祭りであった。

（1）逆ふるさと訪問

「逆ふるさと訪問」は、重介護で島に戻れない要介護高齢者の島外入所施設に訪問し、三線で島歌の披露などの「ふるさと」を届ける地域ケアである。逆ふるさと訪問を誕生させた住民たちの協働のプロセスには、【目的共有の基盤づくり】、【参加型をめざす実践】、【島にある資源の発掘と活性化】、【あきらめずに工夫するケア力】があった。以下、具体的例を示す。

【目的共有の基盤づくり】：診療所看護師は、中断していたふるさと訪問を再開したい思いを島の名士である高齢者に訴えた。それに対し高齢者は、「こちらから会いに行きたいね」と発言したので、「いいアイディアだね。こっちから行こう」と返答した。専門職の必要性と住民のやりたいことの接点を探し、住民のやりたいことをできることに転換し、希少な専門職の連携体制づくりのために企画会議を立ち上げた。

【参加型をめざす実践】：島で腹膜透析をしている高齢者が「島外施設に入所している親戚に会いたい」と逆ふるさと訪問への参加を希望したので、訪問先の B 島の診療所に相談して医療体制を整えた。息子は同行を希望し、旅先での透析の処置と車いすの移動介助を申し出た。高齢者の特性に配慮した意思表出の支援体制づくりをし、情報共有しできることを持ち寄り、住民の力を信じた相互依存をしていた。

【島にある資源の発掘と活性化】：介護事業所で実施している三線サークルに島の若者が高齢者と一緒に三線を習っていた。三線を習うために参加していたので、その若者も同行して披露することになった。若者は発表だけでなく、ボランティアとしての役割も担ってくれた。住民のやりたいことで島の資源を活性化させ、住民のやりたいことが広がる関係者とのつながりになっていた。

（2）島丸ごと認知症サポーター養成講座

島丸ごと認知症サポーター養成講座は、幼稚園児、小中学生、高齢者など対象に合わせて生活文化を題材に全島民へのオリジナルな地域ケアである。取り組みのプロセスには、【島丸ごとのチャレンジの決意】、【生活文化を取り入れたオリジナルな教材づくり】、【当事者と子どもとのふれあいによる交流】があった。

【島丸ごとのチャレンジの決意】：島のほとんどが顔見知りでありながら、認知症高齢者が行方不明になる実態は、住民の知識不足ではなく、専門職の取り組み不足であることを把握した。そのきっかけは、島外講師による認知症サポーター養成講座に、多くの島民が参加し関心の高さを気づかされたことであった。また、知識のない子供たちが、道に迷っている認知症高齢者を大人

のいる場所に案内してくれたことであった。
【生活文化を取り入れたオリジナルな教材づくり】：中学生や成人には、家族の許可を得て実在の認知症高齢者の行動の写真を教材にした。頭に座布団を乗せ、椅子で移動している写真を見せ「○○さんは何をしている？」と問うと、「昔は頭にかごを乗せて、リヤカーを引っ張っていたよ」と昔の生活の話題で盛り上がった。また「○○さんは昔から働き者だったから、今でも畑に行きたいと思っているのではないか」と生活体験を共有しながら認知症の理解と共感が見出された。

（3）介護技術力アップ講座

介護技術力アップ講座は、「島で死にたい」を支える活動として、吸引や腹膜透析など要介護高齢者の必要なケアに合わせて、診療所看護師と医師が介護職などへの知識技術指導を行う地域ケアである。そのプロセスには、介護職は、【技術を習得し、高齢者・家族に協力したい思いの沸き上がり】、【できることを増やし、協働できる人材になる意思の表出】、【島で高齢者の暮らしを支える覚悟と使命感】があった。
【技術を習得し、高齢者・家族に協力したい思いの沸き上がり】：家族にできることは、介護職にもできると思ったし、技術を習得して家族の介護負担の軽減に協力したいと思った。
【できることを増やし、協働できる人材になる意思の表出】：「診療所看護師が提案し指導してくれるなら大丈夫と思えたし、医療と介護は連携して介護サービスはよくなるので、自らも協働できる人材になりたいと思った」と語り、介護技術力アップ講座への参加を希望した。
【島で高齢者の暮らしを支える覚悟と使命感】：「みんなで島の高齢者に必要なことはやろう」と日頃から語り合っているので、技術習得の恐怖心よりもできることを増やし、地域の人を支える覚悟があった。島で高齢者の暮らしを支えるという法人の理念にも通じることであり実現したいと受け止めていた。

（4）花壇づくりで高齢者見守り活動

高齢になり婦人会を退会した婦人たちの趣味活動として「自分の庭づくり」が高齢者ケアに発展　した活動である。花壇づくりで高齢者見守り活動は、婦人たちが趣味として道端の花壇づくりのついでに、一人暮らし高齢者の見守りを行う地域ケアである。そのプロセスは、【趣味活動を増やし楽しみを見出す】、【島の道端の花壇づくりで地域貢献】、【引きこもり高齢者の役割探しと見守り】であった。
【趣味活動を増やし楽しみを見出す】：婦人たちは、趣味活動といて、持ち寄りパーティや島外から講師を招いての生け花教室などの趣味活動に、自宅の庭づくりの苗の交換や草花の育て方の情報交換をしていた。「雑草が生い茂っている道端も花壇にして、島をきれいにしたい」とメンバーから提案があり定期的なサークル活動に花壇づくりが加わった。
【島の道端の花壇づくりで地域貢献】：婦人たちは、草花の植えられそうな場所や、雑草の生い茂った道端を見つけ、苗や挿し木の選定、その確保方法、植栽の順序など相談しながら活動した。
【引きこもり高齢者の役割探しと見守り】：ひきこもりがちな一人暮らし高齢者の道端で花壇づくりをすることになった。雑草取りや水やりなど高齢者にも楽しめるので、仲間に入れることを話し合いで決め、植栽した後の水やりを依頼した。高齢者は道端まで出向き水やりをする役割を獲得した。通りすがりの住民たちが声をかけ交流の機会になっていった。

（5）認知症高齢者の就労支援活動

要介護高齢者の就労支援活動は、要介護高齢者に就労の機会をつくり雇用につなげる地域ケアである。「おしゃべりが止まらず、デイで集団の活動を邪魔する、自分の会話に乗らないとデイ仲間と喧嘩する」認知症高齢者の対象の捉え方を変えてケア方法を工夫し就労につなげた地域ケアである。そのプロセスは、【問題行動を強みと捉えできそうなこと探し】、【売店で就労するための課題共有とその対処】、【支援者のできることで協働】であった。
【問題行動を強みと捉えできそうなこと探し】：同じことを繰り返す「おしゃべり」を問題行動としてではなく強みと捉え、観光客相手の売店の売り子の可能性を模索した。売店の商品は説明できる。島の暮らしは話せる。島の観光地は紹介できる。伝統行事は説明できる。とたくさんできることが見出した。
【売店で就労するための課題共有とその対処】：「自ら動こうとしない、トイレに行きたがらず尿を漏らす、レジが打てない」という課題について、デイ職員は売店の店長と認知症高齢者が就労することを前提に討議し、その対応を話し合った。
【支援者のできることでの協働】：売店までの送迎、薬の管理、昼食の確保、排泄失敗時の対応などの役割分担を具体的に行い、実践した。認知症高齢者は、売店売り子として就労し、有償労働者になった。

（6）すむづれ祭り

「すむづれ祭り」は、主役を島の高齢者として、島唯一のNPO法人主催の祭りで企画から実施評価まで法人職員だけでなく学校教職員、児童生徒、青年会、婦人会など島全体で行う地域ケアである。NPO法人は、島の人々と一緒に「みんなでみんなのものにする島丸ごとNPO」にするための活動を模索し、祭り（「すむづれ祭」）を設立記念式典にあわあせて企画した。その後、毎年実施している。そのプロセスは、【高齢者主役の祭り】、【我が事、丸ごとの高齢者ケア】、【祭りを楽しみ高齢者ケアの評価】であった。
【高齢者主役の祭り】：祭りは、日ごろの高齢者の活動成果の披露と高齢者との交流による楽しみを目的にして開催される。活動成果は、会場での展示、舞台で三線や古謡の披露で司会進行は

高齢者が行うなど主催者としての役割を担う。
【我が事、丸ごとの高齢者ケア】：祭り会場から自宅までの高齢者の送迎は、職員と島に車を有する青年会や小中学校の教職員が担当する。婦人会は、数か月前から島の魚や野菜などの食材を確保し、屋外バザーに出店する。青年会は得意の沖縄そばをふるまう。中学生は飲み物を販売する。バザーの食券販売は教職員、高齢者の接待は小学生である。舞台では、幼稚園児から青年会などの団体や個人が多彩な技を披露する。準備から片付けまでできることをみんなでやる祭り運営である。
【祭りを楽しみ高齢者ケアの評価】：NPO 法人の祭りはみんなのものになっているか？伝統行事や地域行事のように地域共同体のつながりの強化になっているか？人と人とのつながりの広さと深さの存在、地区組織の存在、共同売店の存在、農業ゆいの存在、伝統行事の存在という地域特性の強みは活かされているか？地域の人々に喜びをもたらしているか？などの評価を、沖縄県離島過疎地域支援事業からＨ島に関わってきた島内外の関係者（行政職や専門職）も祭りに集い、島の人々と祭りに参加して楽しみ、活動の評価の機会にしていた。

2）地域の生活文化と高齢者ケア

高齢者ケアの創出のプロセスに見出された 19 カテゴリーから、地域の生活文化を基盤にした地域包括ケアシステムの構築を視野にいれ、生活文化の操作的定義に照らして「自助努力」、「互助づくり」、「共に楽しむ」は見いだせたかの視点で整理した。また、地域の生活文化を基盤にした高齢者ケアの考え方とケアの方法について整理した。

（1）高齢者ケアの創出のプロセスにみる地域の生活文化

「自助努力」には、【できることを増やし、協働できる人材になる意思の表出】、【あきらめずに工夫するケア力】、【島丸ごとのチャレンジの決意】、【島で高齢者の暮らしを支える覚悟と使命感】などがあった。「互助づくり」には、【参加型をめざす実践】、【島にある資源の発掘と活性化】、【我が事、丸ごとの高齢者ケア】などがあった。「ともに楽しむ」には、【趣味活動を増やし楽しみを見出す】、【祭りを楽しみ高齢者ケアの評価】があった。

（2）地域の生活文化を基盤にした高齢者ケアの考え方とケアの方法

地域の生活文化を基盤にした高齢者ケアの考え方には、【参加型をめざす実践】、【島丸ごとのチャレンジの決意】、【技術を習得し、高齢者・家族に協力したい思いの沸き上がり】など 8 カテゴリーがあった。高齢者ケアの考え方は、覚悟と使命感で島丸ごとをめざし、協働できる人材になるためにチャレンジし、楽しみを見出し、高齢者を主役に家族支援を含めてケアを創造すると考えられた。

高齢者ケアの方法には、【目的共有の基盤づくり】、【島にある資源の発掘と活性化】、【生活文化を取り入れたオリジナルな教材づくり】、【問題行動を強みと捉えできそうなこと探し】、【祭りを楽しみ高齢者ケアの評価】などがあった。ケアの方法は、目的共有と課題共有をし、高齢者の強みを探し、あるものを活かし工夫するケア力で、参加型のオリジナルなケアを協働し、評価しあい、楽しみながら社会貢献すると考えられた。

（3）相互扶助体系の重層化と生活文化

研究者の介入（2000 年～2004 年）によって導かれた相互扶助体系の研究成果と本研究による研究成果を整理した。先行研究では、「互助」のエンパワメントにより「公助」と「自助」が影響し、それぞれが地域で連携し強化されていた。本研究では、高齢者ケアの創出のために、住民と実践を継続することで、包括的になり補い合い、重なり合い、重層化していったと考えられた。そして、「みんなでみんなのものにする高齢者ケア」として、地域の生活文化に浸透していったことが示唆された。

引用文献

Michael Bayley.(1973/2009).Mental Handicap and Community Care:A Study of Mentally Handicapped People in Sheffield, Routledge and Kegan Paul,International Library of Social Policy.

野口美和子,大湾明美.(2011).沖縄から漕ぎだす「島しょ 保健看護学」の船出 第１回「島しょ保健看護学」の確立の必要性.看護教育,52(11),942-947.

太田貞司.(2011).地域包括ケアシステム･シリーズ①地域包括ケアシステム(pp11-12).光生館.

大湾明美,宮城重二,佐久川政吉,大川嶺子.(2005).沖縄県有人離島の類型化と高齢者の地域ケアシステム構築の方向性,沖縄県立看護大学紀要,6,40-49.

大湾明美.(2005).沖縄県の一離島における高齢者の地域ケアシステム構築に関する研究―波照間島の事例,女子栄養大学（保健学）学位論文.

沖縄県立看護大学.(2019).地域医療介護総合確保基金 島しょ・へき地の地域包括ケアシステム構築支援事業―5 か年間のまとめ（21 島のカルテを中心に）― 平成 30 年度成果報告書.

下地敏洋.(2006).高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究―宮古出身者の地域文化行動を通して―,沖縄県立看護大学（看護学）学位論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田場由紀，大湾明美，山口初代，砂川ゆかり，宮里智子，西平朋子	４．巻 17
２．論文標題 島嶼地域における高齢者の「地域によるケア」にみる互助の機能	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本ルーラルナーシング学会誌	６．最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 美底恭子,大湾明美,田場由紀,砂川ゆかり
２．発表標題 高齢者を活かした人材育成に関わる離島診療所看護師の役割
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第12回学術集会（奄美）
４．発表年 2017年

１．発表者名 美底恭子,大湾明美,田場由紀,砂川ゆかり,山口初代
２．発表標題 「ふるさと」を活かした高齢者への協働による島のケア力
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第13回学術集会（香川）
４．発表年 2018年

１．発表者名 美底恭子,大湾明美,田場由紀
２．発表標題 「生まれ島で死にたい」を支える看護実践―診療所看護師の協働連携に焦点をあてて―
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第14回学術集会（宮古島）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口初代,大湾明美,田場由紀,砂川ゆかり,光来出由利子,美底恭子,田盛佳世
２．発表標題 認知症高齢者の問題行動が地域の資源に生かされる地域ケア
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第16回学術集会（Web集会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 美底恭子,砂川ゆかり,大湾明美
２．発表標題 「島で住み遂げる」を支えるケア力を育む実践
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第17回学術集会（Web集会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大湾明美	４．発行年 2021年
２．出版社 オフィス・コオリノ	５．総ページ数 235
３．書名 島に学ぶ地域ケア　高齢者の豊かな人生を創る発想の転換	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	野口　美和子 (Noguchi Miwako) (10070682)	沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・名誉教授 (28002)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石垣　和子 (Ishigaki Kazuko) (80073089)	石川県立看護大学・看護学部・教授 (23302)	
研究分担者	田場　由紀 (Taba Yuki) (30549027)	沖縄県立看護大学・看護学部・教授 (28002)	
研究分担者	山口　初代 (Yamaguchi Hatsuyo) (70647007)	沖縄県立看護大学・看護学部・助教 (28002)	
研究分担者	佐久川　政吉 (Sakugawa Masayoshi) (80326503)	沖縄県立看護大学・看護学部・教授 (28002)	
研究分担者	砂川　ゆかり (Sunagawa Yukari) (00588824)	沖縄県立看護大学・看護学部・助教 (28002)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関